これはサンプル版の紙面です。

作家
喜多川　泰
Kitagawa Yasushi

蘭学者は、なぜ突然歴史から消えてしまったのか？

僕は、いつの時代もどんなに時代が変わっても、「新しい扉を開く鍵は学びの中にある」と思っています。

以前の時代の流れはゆっくりで、30年、40年と変わらないものがたくさんありました。

だから親も大人も先生も、子どもたちに、「勉強を頑張っておけば大丈夫」と自信を持って伝えられていました。

ところが今は時代のサイクルがあまりにも早くなり、「学んでいれば大丈夫」とは言い切れなくなりました。

「10年後もあり続ける仕事」さえ、なかなか見えません。それが今の時代のしんどいところです。

だからといって「学び」の必要がなくなったわけではありません。重要なのは、「何かを獲得するための学び」ではなく「学びの学び」、つまり「学び続ける」ということなのです。

「学び続ける」ことが重要な理由はいくつかあります。

その一つが、「ずっと大事にしてきたものでも、時にはければならないときがある」ということです。

時代の変化に合わせて、今までのものを捨て去り、新しいものを得るために「次」へと踏み出す勇気が必要になることがあるのです。

仕事もそうです。どんな仕事も、ある日突然世界中から必要ではなくなることがこれからの時代では起こります。

だからこそ、僕らは「学びの姿勢」を持っておいたほうがいいのです。趣味や習い事でもいいから、とにかく学んで知識を広げておくことが大事です。

あの福沢諭吉もそうでした。彼は鎖国が続く幕末の時代の中、「学ぶべきはオランダの学問だ」と、懸命にそれを学んでいました。

ところが鎖国が解かれて西洋文化が入ってきてみると、「世界の学問の中心はもうオランダじゃない。英語だ。アメリカだ」と気づくのです。

諭吉はそこから一転して英語を学び始めます。そしてアメリカに渡り、勉強をし直しました。

ところが、当時「蘭学者」と呼ばれた人たちの多くは、オランダに固執し続け、学び直すことをしませんでした。

その結果、時代が「明治」に変わった途端、「蘭学者」たちはもはや歴史に登場することはなくなりました。

考えてみてください。小さい時から、「オランダ語とオランダ医学が大事だよ」と言われて、ずっと一生懸命勉強してきたのに、25歳くらいである日突然、「もうこれからの時代はオランダじゃない。これからはアメリカだ」と、諭吉は宣告されたのです。

そんなこと突然言われても、今までの努力や知識をなかったことになんて簡単にはできませんよね。

「俺がこれまでどれだけオランダ医学に人生を懸けてきたと思ってんだ。ふざけるな」って思いますよね、普通。

変化のサイクルが遅い時代なら、今までのものを捨てなくても、そのままやれるのかもしれません。

でも現代のようにサイクルが早い時代では、生きていくためには「捨てること」はどうしても不可欠だと思うのです。

皆さんが今やっている仕事も、今後何年と続けられれば幸せなことでしょう。

しかし、近い将来、それを許さない世の中がやって来るかもしれません。そのための備えは常に考えておかなきゃいけないのです。

大事なのは、そのために僕らは日々何をして備えるのか、です。

その備えの一つが「学び」です。常に学んでいくという姿勢があれば、時代の変化にもきっと対応することができるはずです。

そのことを諭吉さんは教えてくれているのです。

人間にはどんな仕事が残されるのか？

（株）感性リサーチ代表
黒川　伊保子
Kurokawa Ihoko

私は17歳の高校2年生です。もうすぐ進路を決めなければいけないのです。私が社会で活躍できるであろう10年後の世の中はいったいどうなっているのでしょう。人間にどんな仕事が残っているかも分からない。私は何を学んだら良いのか分からないのです。

私のところに数年前、ある女子高校生から手紙（メール）が届きました。

そして、「次の質問に答えてほしい」と書かれていました。

①人工知能に何ができますか？
②人は、人工知能に仕事を奪われますか？

最初の「人工知能には何ができますか？」の質問の答えは、「人が想像することは何でもできる」です。

今後、人工知能は「気づく」という分野にも踏み込めるようになります。人工知能が扱えるデータ量から、人の想像をはるかに超える発見が生まれることも十分に考えられます。

人間の身体的データや行動データからの人工知能による謎解きや予測も進んでいます。これにより、人間では気づけなかったことを複合的なデータの組み合わせにより人工知能が気づくこともたくさん出てくることでしょう。

ただ、このように人工知能は新しい気づきをもたらしてくれますが、それは人間と一緒でないと使い物にならないのも事実です。

人工知能は十分に成熟するまでに山のように「ゴミ」を出すからです。

その中から、どの情報が重要であるかどうかをジャッジできるのは人間だけです。つまり、人間がいて初めてそれは重要な「情報」に変わるということです。

つまり人工知能は、人間と一緒にいて初めて使えるのです。そういう意味で人工知能はあくまでも機械であり、それ以上ではないのです。

ただ、ビッグデータと共にある人工知能は、紛れもなく人類にとっての「魔法のランプ」になり得るのは事実です。

二番目の質問、「人は人工知能に仕事を奪われるか？」です。

定型業務や、数字や前例にこだわって客観的判断を下すような、従来のエリートたちがやっていたような仕事は人工知能に取って代わられるでしょう。

でも、増える仕事もあります。それは「知の方向性を決めていく仕事」です。

アメリカでは、スポーツ記事や経済記事の6割ほどをすでに人工知能に書かせているといいます。

でも、記事というのは実は新聞社ごとに書きぶりが違います。その新聞社らしいモデルについては、人間がデザインする必要があるのです。

つまり、何をもって「らしさ」とするかで新聞社の世界観が決まるわけですが、そういった人工知能開発の「肝」の部分はやっぱり人間が作るということになるのです。

その時に必要になるのが「マニア力」です。つまり、これから身に付けるべき必要なスキルはそうした「マニア力」だということです。

そんなわけで、質問をくれた女子高校生に、私はこのように返事を書きました。

「これから求められるのはマニア力です。徹底的に何かを好きになって探求せずにはいられない、寝るのも惜しんで探求せずにはいられない、起きている間に何度も考えてしまう。それくらい好きなものと、どうぞ出会ってください」

「それがもし学術の領域にない時は、自分の好きなものを日常の中に見つけてね。例えばそれはコンビニプリンでもいいから」

好きすぎて、「地域限定プリンを食べに北海道まで行っちゃう」くらいのマニア力だったら、それも十分武器になるということなんですね。

脳は、好奇心の回路を一度作ると、その回路をその後も使えて応用の道も見えてきます。ですから若いうちは大いに好奇心を発揮しましょう。

こんな人たちも『日本講演新聞』に掲載されました！

建築家 **隈研吾さん**　　落語家 **桂二葉さん**
コラムニスト **ジェーン・スーさん**　　書道家 **武田双雲さん**
俳人 **夏井いつきさん**　　芥川賞受賞作家／お笑いタレント **又吉直樹さん**
京都大学 iPS 細胞研究所名誉所長 **山中伸弥さん**　　臨済宗円覚寺派管長 **横田南嶺さん**

「本場のディズニーで働く！」夢を叶えた方法とは？

（有）香取感動マネジメント代表
作家／講演家
香取　貴信
Katori Takanobu

僕は若いころ、東京ディズニーランドでアルバイトとして働き始めました。そこでかけがえのない人物と知り合いました。加賀屋克美くんです。

彼は「熱意」「情熱」の人です。ディズニーが好きでたまらないんです。アルバイトの面接で約1時間、ディズニーランドへの熱い思いを語り続けて合格したくらいです。

私服になると、頭から足の先まで全部ミッキーの柄です。

彼は夢を抱いていました。

「あのね、香取くん。2年後の秋に今世紀最高で最大のアトラクション『スプラッシュ・マウンテン』がオープンする。僕はどうしてもそのスタッフをやりたいんだ！」と。

スプラッシュ・マウンテンの建設工事が始まると、彼の行動はいよいよ怪しくなりました。

ちょっとでも時間があるとチケットを買ってディズニーランドに行き、工事現場の様子を撮影しているんです。「できあがってからじゃ撮れないところがあるから」と。

撮るだけではありません。加賀屋くんは実際の工事と同時進行でアパートの部屋の半分以上を占める大きさのスプラッシュ・マウンテンの模型をつくっていました。

撮った映像を参考に自分で作っていったそうです。こうなると彼は、もう単なる「オタク」ではなく、「アトラクション博士」ですよね。

いよいよスプラッシュ・マウンテンが完成し、社内でスタッフが募集されました。人数が多く抽選になったのですが、彼だけは抽選する前から受かっていました。なぜか？

加賀屋くんの熱すぎるくらいの思いをみんな知っていたのです。

それで彼だけ特別枠として合格させ、残りの人たちで抽選をしたのです。

こうして加賀屋くんは念願のスタッフになれたのですが、彼には新しい夢ができました。

「本場アメリカのスプラッシュ・マウンテンのスタッフをやりたい！」と。

3年後、彼から連絡がありました。「来週から1年半、向こうで働くことが決まった！」と。

どうやって叶えたか？

「アメリカにも自分みたいなディズニーオタクの従業員がいるはず。その人と知り合いになれば働く糸口が見つかるのでは」と加賀屋くんはひらめきます。

そしてそれを行動に移したのです。

加賀屋くんはアメリカに到着すると、東京ディズニーランドのおみやげを体中につけ、アメリカのディズニーランドを歩き回りました。

すると、なんとアメリカのディズニーランドのスタッフに声をかけられたんです。やっぱり神様っているんですね。

加賀屋くんはその人から「日本のディズニーストアに入れば、研修でアメリカに行ける」と聞き、半年後に行われる試験に向けて猛勉強を始めます。

当時、日本では３００人くらいがその試験を受けたのですが、彼はたった2人の合格者の中に入りました。

「本当にやりたいのは、アトラクションのスタッフだろう。でも向こうでやるのはお店のスタッフじゃないか」と僕は彼に言ったのですが、加賀屋くんは「大丈夫！　行けば何とかなる」と動じないのです。

結局アメリカでの1年半の間に加賀屋くんは二つのアトラクションのスタッフをやりました。やり方はそれまでと同じ直球勝負で、とにかく時間があればスプラッシュ・マウンテンに行って、スタッフに直談判するというものでした。

「僕は日本でこのアトラクションのスタッフをやっていた。アメリカでもこれをやるために来た。お願いだから、ここで働かせて！」と。

そんな熱烈アピールを続けた結果、最後は向こうのスタッフ全員が加賀屋くんをマネジャーに推薦してくれたそうです。

「やる！」と自分自身と約束したら絶対に諦めないのが、加賀屋くんのポリシーです。

彼はそうやって夢を叶えてきたのです。

止まっていた時を再び動かす「絆画」

山本考弘 essay
明日を笑顔に

「絆画作家」の大村順さん(37)に出会ったのは、ある催し物の会場をお互い間違えたという偶然の縁だった。初めて聞く肩書きに私は興味を惹かれた。

「絆画」とは、大切な亡き人の「現在」の姿を遺族と共に描いた絵だ。迎えるはずだった入学式、成人式、結婚式……。そんな節目の時間を絆画の中に描く。公園で一緒に遊ぶ日常の姿が描かれることもある。

◎　◎

体の弱かった大村さんには和人君という親友がいた。彼は27歳の時に突然他界した。大村さんは長らく連絡を取っていなかった数年間をひどく後悔した。

和人君の死から５年後のこと。

大村さんは「家族写真をもっと撮っておけばよかった」という彼の母・悦子さんのＳＮＳの書き込みを見つけた。その日は和人君の誕生日だった。

その想いを知った大村さんは一枚の絵を描いて和人君の家に届けた。悦子さんは絵を見て驚いた。やがて言葉を失い、泣き崩れた。

そこには和人君を中心に両親とお兄さん一家が描かれていた。悦子さんが驚いたのは和人君の顔つきだ。悦子さんは和人君の腕に手を添えている。その彼の顔は５年の月日を重ね、30代になっていた。

それが初めて大村さんが描いた絆画だ。

私は過去に描いた絆画をスマホで見せてもらった。その中の１枚の絵に惹かれた。白衣を着た白髪交じりの医師の絵だった。

その絵を直接見たくなった私は、大村さんに連絡を取ってもらい、翌日、岐阜県美濃加茂市まで絵の依頼者である渡邉さんのご自宅を訪問した。

◎　◎

絵に描かれた渡邉詠身（わたなべえいしん）さんは17歳の時に病気でこの世を去った。医師になるのが夢だった。

ご両親の話では、彼は毎年１月に１年間貯めたお小遣いにお年玉を足して福祉団体に寄付する優しい子だった。彼の夢は人を助けるために医師になることだった。そんなしっかり者の彼が亡くなる前の日、ふいに「お父さん、抱っこして……」と囁（ささや）いたそうだ。その様子をお母さんは「まるで赤ちゃんに戻ったみたいだった」と言う。

お父さんは何年かぶりに息子を抱き上げた。「あれは詠身が私たちにさよならを言いたかったんだと思います」、お母さんはそう言って絆画を見た。

「今までは高校生の時の遺影に話しかけていました。でも今は大人になったあの絆画の詠くんに話しかけています」

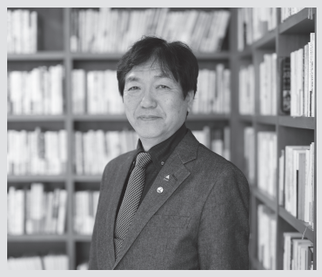
大切な人を亡くすと「あの日から時が止まったように感じる」という遺族の声を時折耳にする。

絆画には、その止まった時計の針を再び動かす力があるのかもしれない。

（中部支局長）

心が前向きになれる情報がどこにあるのか…
探していたら一つだけありました。それは講演会でした。

講演会には講師の「聴いてくれる人を元気にしたい」という想いがあります。そして、一つひとつの講演には主催する人の「この話をたくさんの人に聴いてほしい」という想いがあります。遠くて聴きに行けない講演会、時間が取れなくて行けない講演会を、皆さんに代わって取材に行き、「ここが面白かった」というところを厳選して分かりやすく編集してお届けしています。この講演記事は何十年経っても全く色褪せないで、読む人の心を潤してくれます。



魂の編集長 **水谷もりひと**

読みたい時に　読みたいカタチで
日本講演新聞はライフスタイルに合わせて、お好きなカタチをお選びいただけます

✓ 紙版　✓ WEB 版　✓ 音声版

契約者さま特典 ジュニア版　PDF形式で無料ダウンロードできます お子さん、お孫さん、生徒さんに！

何十年経っても色褪せない講演記事を試読する⇒
1ヵ月（4回分）無料でお届けします